

すみっこでみるゆめ



古原 小鞠

## すみっこにすむわたしのはなし

---

二年前、引っ越しをした。事情は割愛するが、そのころのわたしは弱っており、やすらげる部屋をぼんやりと探していた。

内見したときに付き添ってくれた友人が後で言うには、わたしはまるで漫画みたいに、「ばあああっ」と擬態語を添えるにふさわしいくらい顔がほころんだのだそうだ。そこが今の住処で、わたしが何にそんなに喜んだのかと言えば、それは「すみっこ」だった。

その部屋には、柱の関係か、ひとが二三人立てばいっぱいになるくらいの、区切られた空間があり、家具の配置が難しい間取りだった。その「すみっこ」が、わたしを歓喜させたのだった。

小さい頃からわたしは「すみっこ」が好きだった。ソファと窓の間にあった、子どもがひとり座れる程度の小さなスペースが実家のわたしの定位置で、気分の良いときも悪いときも、そこに座り込んで本を読んだ。あの空間を思い出させるその小さな空間が、大人になってまた手に入ったことがうれしかった。

すみっこが好きで、すみっこ、と名付けられた猫の話と最近出会った。わたしが好きで好きで好きで、たまらない、繰り返し読み続けている小説の文庫版についていた、書き下ろしで。

部屋の小さなスペース、そこにうずくまって、本を抱えて夢中で読む子ども。それがわたしだ。歳をとっても変わらない。そうして養ったささやかな想像力は、いつもわたしを慰めたし、励ましたし、助けてくれた。ともだちがいなかったわけではない。それなりにごく普通の社交性もある。それでもわたしが安らぎ、幸福になる時間のひとつは、想像力と遊ぶ時間だった。自分だけの世界で、たくさんのなにかと幼いわたしはよく会話をした。親は嫌な顔をしたから、歳を取るにつれてひとりごっこ減ったものの、頭の中にはたくさんの自分の世界の住人が居た。拙いながらも小説を書くようになったりも、した。

それを肯定して、支えてくれた本が「...絶句」という、想像力が世界の運命を握る小説だった。自分と同じことをしているひとがここに居る、と思ったことを覚えている。自分の想像世界が実体化してしまうSF小説。一人称の先駆者とも言われる新井素子さんの小説である。自分の作中のキャラクタが現実化して一緒に暮らしてくれて、はちゃめちゃな生活を送る、こんな楽しそうなことがあるだろうか。主人公のもとちゃん、にわたしはなりたかった。今でもなりたいと思う。想像力を時には武器に、時には凶器に、想像力から生まれた、想像力を駆使する、想像力の世界の物語。誰にも迷惑をかけないひとりあそび。

だからわたしは今日も、部屋のすみっこで、本を読み続けるのだ。想像力と遊ぶために。